

高橋 守著『私家版・私の履歴書 半生を報道人として生きて』400字詰め250枚ほど、お読みくださる方に、Eメールに添付してお送りします。希望される方は、[sky60@kc5.so-net.ne.jp](mailto:sky60@kc5.so-net.ne.jp)に空メールを。

私は、1962年(昭和37年)に写真学科を卒業、時事通信社の記者として、長く報道の世界に身を置いた者です。入社後、グラフ誌の編集で大使館回りなどをしたころ、文部省詰めに転じ、平記者から管理職まで26年余り、教育行政の報道に深くかかわった時代、文部官僚や大学人などとの交流、日本新聞協会の求めでNIE(教育に新聞を)運動にかかわり、旗振り役として講演活動などのため全国を回っていたころ、独立行政法人・教員研修センターやいくつかの財団で評議員を務めたこと、さらに誕生から江古田キャンパスでの学生生活などを書いています。

在職中に、大学本部から、どこかの学部でマスコミ論などを講じてくれないかとのお誘いを受けましたが、編集局長の方針でお受けできず、残念なことをしたこと。大学時代教授としておられた三浦朱門氏とは、文化庁長官時代に再びお付き合いいただいたこと。ドイツ語を教えていただいた赤塚行雄氏。彼は、芸術学部文芸学科から大学院、さらにスタンフォード大学で学んだという経歴で、その後評論家として活躍しましたが、「侵略・進出」をめぐる教科書問題の時、新たな検定基準について検討する文部省の会議の委員を務め、久々に顔を合わせたことなども書いています。主な関連記述は以下の通りです。

高校を卒業すると、日本大学芸術学部写真学科に進学、写真を手掛かりにマスコミにという戦略だった。学科の主任教授は金丸重嶺である。

講義は、専門の科目以外にも、西洋美術史、日本美術史、色彩学、ジャーナリズム論など、興味深いものが少なくなかった。英語は、O・ヘンリーの短編『最後の一葉』『賢者の贈り物』を読むなど、とても面白かった。

ドイツ語は、ヘッセの『青春は美わし』。担当は、芸術学部文芸学科から大学院、さらにスタンフォード大学で学んだという赤塚行雄。彼はその後評論家として活躍したが、「侵略・進出」をめぐる教科書問題の時、新たな検定基準について検討する文部省の会議の委員を務め、久々に顔を合わせたのであった。

学生食堂は、うどんが20円、ラーメンが30円、カレーが50円という時代だった。

池袋でよく行ったのが、人生座、文芸座という2つの映画館。型破りな作家、三角寛が48年、まだ一面の焼け野原だったこの地に、文士たちの助けを借りて、木造の人世座を開業、さらに文芸坐もスタートさせたのだ。人生座が面する東口の都電通りは、まだ砂利道であった。

私は、学部自治会の執行部の一員として、事務局長を務めた。その関係で軽井沢で開催された合宿研修の際に、たしか文芸学科の教授だった三浦朱門と交流する機

会があった。三浦は後に文化庁長官の職に就くことになり、仕事上の出会いを持つことになる。

自治会の仲間には、大学に残った園田芳生、中山祐二、二期会に行った藤沢壮一のほか、映画監督や俳優になった者がいる。園田は福岡での役所勤めから映画学科に入った苦勞人で、大学本郡広報課長の時、久々に再会した。

同期に、共同通信、毎日新聞など報道界に進んだ者が何人かいる。梅津禎三は朝日新聞に入社。東京本社写真部長に昇進したが、89年、部員が沖縄のサンゴ礁に傷をつけて撮影するというねつ造報道事件が発生、管理責任を問われて更迭されてしまった。

他学科の同期には、映画監督でタレントの山本晋也、この人は応援団で活動していた。1年後輩に篠山紀信。音楽学科には同じころ、作曲家になった猪俣公章、森田公一、演劇学科には役者になった藤竜也がいたようだ。

三浦朱門は、文化庁長官時代、『にわか長官の510日』（朝日新聞社刊）という本を書いた。結構面白く読ませてもらったが、事実関係の間違いが多数ある。例えば「文教委員会」と書くべきところを「国会の文教部会のような委員会」と書き、そのあと何か所も文教委員会を「文教部会」と書き間違えている。自民党の文教部会とごっちゃになったのだろうが、小説を書く人は、こういうことを案外気にしないようであった。

休日には、これから書く小説の主人公を住まわせる場所を探しに出かける、そんなことも話してくれた。

彼からは、親友・遠藤周作と熱海に泊まった時に、お化けが出てほうほうの体で逃げ出したという珍談を聞いた。

文部省の食堂に、500円の「赤弁」というのがある。値段が値段だから、大した弁当ではない。阿川弘之が訪ねてきたとき、「一緒に赤弁を食べないか」と誘うと、「残り少ない人生で、そんなものは食べられない」と、阿川にきっぱり断られたという。

文部省の隣、大蔵省(のちの財務省)にもこんな弁当があったらしい。ここの記者クラブは財政研究会、「財研」という。田中角栄が大蔵大臣を務めた時のこと。田中は時々、財研に出かけ、記者たちと一緒に安い弁当を食べたという。田中一流の人心収攬術である。